

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 8日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820012

研究課題名（和文） 軍記物語の生成と流動に関する総合的研究

研究課題名（英文） A general study on formation and metamorphosis of war chronicles

研究代表者

原田 敦史 (HARADA ATSUSHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：90584657

研究成果の概要（和文）：軍記物語は、絶えずその姿を変え続けてきた流動の文芸である。それらの作品がどのように生成し、膨大な数の諸本を生み出していったのかを問うという課題に対し、本研究では『平家物語』を中心として分析を行った。諸本本文の関係を明らかにし、それらの背景にどのような文学的方法の相違があったのかを考えることにより、諸本の流動を一つの文学史として描き出すための基本的な視座を得たことが、その主たる成果である。

研究成果の概要（英文）：War chronicles is a fluid work, which has always changed its form. In this study, I analyzed mainly "Heike Monogatari" examining that how these works had been formed and immense numbers of various manuscripts had been born. The main research result is that I obtained basic point of view to express the fluid of various manuscripts as a history of literature by clarifying the relationships between various manuscripts and considering what kind of differences in literary method exists beyond background of various manuscripts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,310,000	693,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：軍記物語

1. 研究開始当初の背景

軍記物語には、同一の書名を冠する作品であっても、質・量ともに大きく異なる多様な諸本がある。それらがどのようにして生み出され、姿を変え続けてきたのかを問うこと

は、軍記物語研究において不可避の課題と思われるが、近年では諸本流動史の全体を見通すような研究は稀である。その背景には、「古態」との評価を受けた異本に関心が集中し、その資料的連関を究明することに、多くの研

究者の力が注がれているという実状がある。特に、『平家物語』の延慶本研究において、それは顕著である。そうした研究は自ずから作品の部分へと着目し、一つの異本を文学としてどのように評価するのかという課題に対して消極的になる。そのような視点から、諸本の総体を文学史として捉えるような発想は生まれにくい。

また、近年では、かつて古態との評価を受けた異本でも、他諸本に対して全面的に古さを主張できるものではないことが実証されてきている。ならばなおのこと、諸本の流動をどのように捉えるかという問題は、異本それぞれをどのように読み解いてゆくかという、文学的な評価の問題と不可分なのである。

2. 研究の目的

本研究は、上記「1. 研究開始当初の背景」に示したような問題に対して、中でもとりわけ多くの異本を有する『平家物語』を対象として、諸本群の全体像を把握することを目的とする。それは、思想史や宗教史の側面から軍記物語の一部分を切り取るのではなく、異本それぞれの「読み」を通じて析出した文学的評価に基づき、その流動自体を一つの文学史として構築するということである。

その意義として、大きく次の二点を挙げることができる。一つは、敬遠されがちな諸本の問題に筋道を見いだすことで、読者と研究者との間の溝を少しでも埋めてゆこうということである。研究の成果を一般の読者へと開いてゆく道筋は、資料博搜に埋もれている中からは見えてこないだろう。もう一つは、他の軍記物語作品との比較検討を可能にする視座を確立するという点である。『平家物語』の諸本流動という問題の本質を明らかにすることは、同様に多くの諸本を持つ『保元物語』『平治物語』『承久記』といった他作

品との関連から中世文学史を論じるという、大きな課題にも裨益することになるのである。

3. 研究の方法

如上の目的に対する本研究の方法は、以下の二点を柱とする。一点目は、諸本本文の関係を、綿密な比較検討により正確に把握するということである。全面的に古態を主張できる異本は現存しないのであれば、部分ごとの本文研究を蓄積してゆくことは、常に継続されなければならない課題である。二点目は、本文の検討によって得た問題点を糸口として、諸本の文学的な方法・性格を評価してゆくということである。諸本流動を文学の問題として描き出すことは、個々の異本の読解を積み重ねることによってしか成され得ない。

上記の方法を、単に部分の問題で終わらせないためには、立論の焦点を奈辺に当てるかが肝要である。本研究では、「語り本系」「読み本系」の二つに大別される『平家物語』諸本のうち、前者の成立に問題を絞った。延慶本をはじめとする読み本系に古態が多く残されているという理解が一般的だが、全てにおいて古態と言える異本はない。ならば、それらとは質・量ともに大きく異なる語り本がいかに成立してきたのかを明らかにすることは、「『平家物語』自体の成立から語り本の成立まで」と「それ以後」の双方を見渡し、諸本流動の全体像を把握する上で最も有効な視座となると考えるからである。

4. 研究成果

「語り本の成立」に焦点を当て、本文研究を糸口として文学的な評価に踏み込むという方法による本研究の成果は、〔雑誌論文〕の項に掲げた二本の学術論文に集約される。①「屋代本『平家物語』における維盛関連記事の形成」において行ったのは、語り本巻十

に記される、平維盛の出家に関わる記事の検討である。語り本の当該記事は、読み本系的な本文の再編によって成っている。その痕跡を所々に留め、他の語り本に対して古い姿を伝えていると思われるのが、屋代本である。矛盾や齟齬を発生させながらも、新たな物語を生み出そうとしている屋代本の分析からは、語り本の形成過程と、それを通じて新たに獲得した特質がいかなるものであったのかが看取できる。

屋代本は、読み本系諸本において広範囲に散在している記事を、かなり自由に切り貼りし、一箇所に集中させる形で再編している。ただし、その母体となった本文の面影は、延慶本だけでなく、他の読み本系諸本も視野に入れなければ見えてこない。屋代本は、そうした改編作業を通じて、「世をあぢきなく感じて出家を志し、妻子への愛を断ち切って往生していく」維盛像を、「妻子への愛ゆえに絶望し、自死を選ぼうとする者が、最後に救われる」姿へと変質させている。仏教的に筋道の立った読み本系に比して、語り本系における維盛の救済は情緒的な色合いを強めている。その文学的な方法は、維盛北の方の描写に際し、悲劇的な心理描写を削ぐ代わりに、夫のために出家する役割を与えているという点からも、語り本の特質として認めることができる。

続く②「『平家物語』語り本の形成一巻六の叙述を中心に一」で対象としたのは、各地で反平家の乱が続発する中、清盛が世を去り、さらに反乱の火の手が広がってゆくという、巻六を中心とした記事である。ここでも、語り本系諸本の叙述は、読み本系的な本文の再編から成っていることは、前述の維盛と同様である。語り本が、頼朝挙兵から横田河原合戦に至る読み本系の記述を組み替えて作られていることは「墨俣合戦」の記述からも

明らかであり、その過程において、東国の内乱に関する多くの記事が切り捨てられている。その再編を経て語り本が捨象したものの中には、語り本系と読み本系という、『平家物語』の二大系統間の本質的な相違が内在している。読み本系の基本的な立場は、王法の衰滅と回復を語る場所にある。その視点から、帝王を脅かすほどの専横によって偽りの宣下を乱発しながらも、実際の戦闘においては敗北を重ね、神仏からも見放されて凋落してゆく平家の姿と、文覚を介して得た真の院宣を掲げ、神仏の加護をも受けて勢力を拡大してゆく頼朝の姿を、対照的に描き出す構造を持っている。中でも延慶本が、おびたしい数の文書類を投入するという独自の構成によって、こうした叙述姿勢を最も強く打ち出しているのは、読み本系の本質を、極端な形で顕現させたものといえる。一方の語り本には、この「王法の歴史語り」という視点はない。それを解体するかわりに、滅亡に向かう平家の運命を焦点化していくのが語り本の叙述であり、そのことは、東国の内乱に関わる記事の多くを切り捨てる中で「宣旨」「宣下」の持つ意味を希薄化させていることや、「墨俣合戦」に、平家の運命の末を示すものという、新たな意味を付与していることから看取できる。「王法の歴史」から「平家の物語」への転換こそが語り本の成立において本質的な問題なのである。語り本がそれを獲得するまでの過程に大規模な再編が想定される以上、関東席捲に至るまでの頼朝挙兵譚の詳述や横田河原合戦の年次といった、両系統を区別する指標となる記事についても、『平家物語』本来の姿は、読み本系諸本の中に見いだすべきであると考えた。ただし、延慶本のみをとりあげて、それを語り本の母体と断ずるわけにはいかないことも、①の指摘と同様であり、延慶本の個性もまた、延慶本

が独自に獲得したものと認めるべきである。

以上二つの成果からは、情緒への傾斜と「王法の歴史」からの転換という二つの特質こそが、語り本の成立を支えるものであったことが読み取れる。その一方で、読み本系の極北ともいえる延慶本が生み出された。『平家物語』諸本はいずれも、この二つの大きな流れの中にあるということが出来る。その軌跡は、他の軍記物語作品の場合とどれほど似ていてどれほど異なるのか。たとえば、『保元物語』や『平治物語』の古態とされる諸本においては、前者では源為朝、後者では藤原信頼（および源義朝）という、ともに固有の歴史観を担わされ、作品成立の根幹を支える、強烈な個性の持ち主が造形されている。その個性を希薄化させ、新たに組み直すことで、様々な異本が派生していったという過程が予想されるのだが、それは上記の『平家物語』の場合とは、やや様相が異なるようにも思われる。そうした問題について諸作品を比較検討することは、中世文学史の中に軍記物語を位置づける上で、大きな意義を持つだろうという見通しを得ることができた点もまた、本研究における成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 原田敦史、屋代本『平家物語』における維盛関連記事の形成、東京大学国文学論集、査読有、第6号、2011、31-48
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/43740/1/kr006003.pdf>
- ② 原田敦史、『平家物語』語り本の形成—巻六の叙述を中心に—、国語と国文学、査読有、第88巻第6号、2011、35-52

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 敦史 (ATSUSHI HARADA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：90584657

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

